



# 緊急支援・災害後の暮らしへの学術的アプローチの あり方

北後, 明彦

---

**(Citation)**

神戸大学震災復興支援・災害科学研究推進室第6回シンポジウム「学術的知見を活かして大規模災害に備える」：緊急支援・災害後の暮らし

**(Issue Date)**

2017-12-01

**(Resource Type)**

conference object

**(Version)**

Version of Record

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90004572>



# 緊急支援・災害後の暮らしへの 学術的アプローチのあり方

神戸大学都市安全研究センター教授 北後明彦

## ＜シンポジウムテーマ 問題の所在＞

- 学術的知見を活かして大規模災害にそなえる  
～ 緊急支援・災害後の暮らし～
- 「熊本地震後の緊急支援、復旧復興支援、東日本大震災の現状を見るならば、必ずしも阪神・淡路大震災での経験や、その後の学術的な蓄積が十分に活かせているとは言えない状況にあります。」

# 学術的な蓄積が十分に活かせている とは言えない状況

- どのようなところで、活かせていないか  
初期対応／避難生活／仮住まい／なりわい再興
- なぜ、活かせていないのか
- その一方で、活かせている分野もある  
文化継承／災害医療／経済政策  
(リスク・アセスメント／システム開発)

# 2016年4月の熊本地震による被害

## 1. 建築物の倒壊等による被害

- 地震の発生状況
- 大きな被害の原因(断層、軟弱な地盤、建物の古さ)
  - 活断層の直上や非常に近い場所が壊滅的な被害
  - 事前の対策状況
- BCPによる最小被害

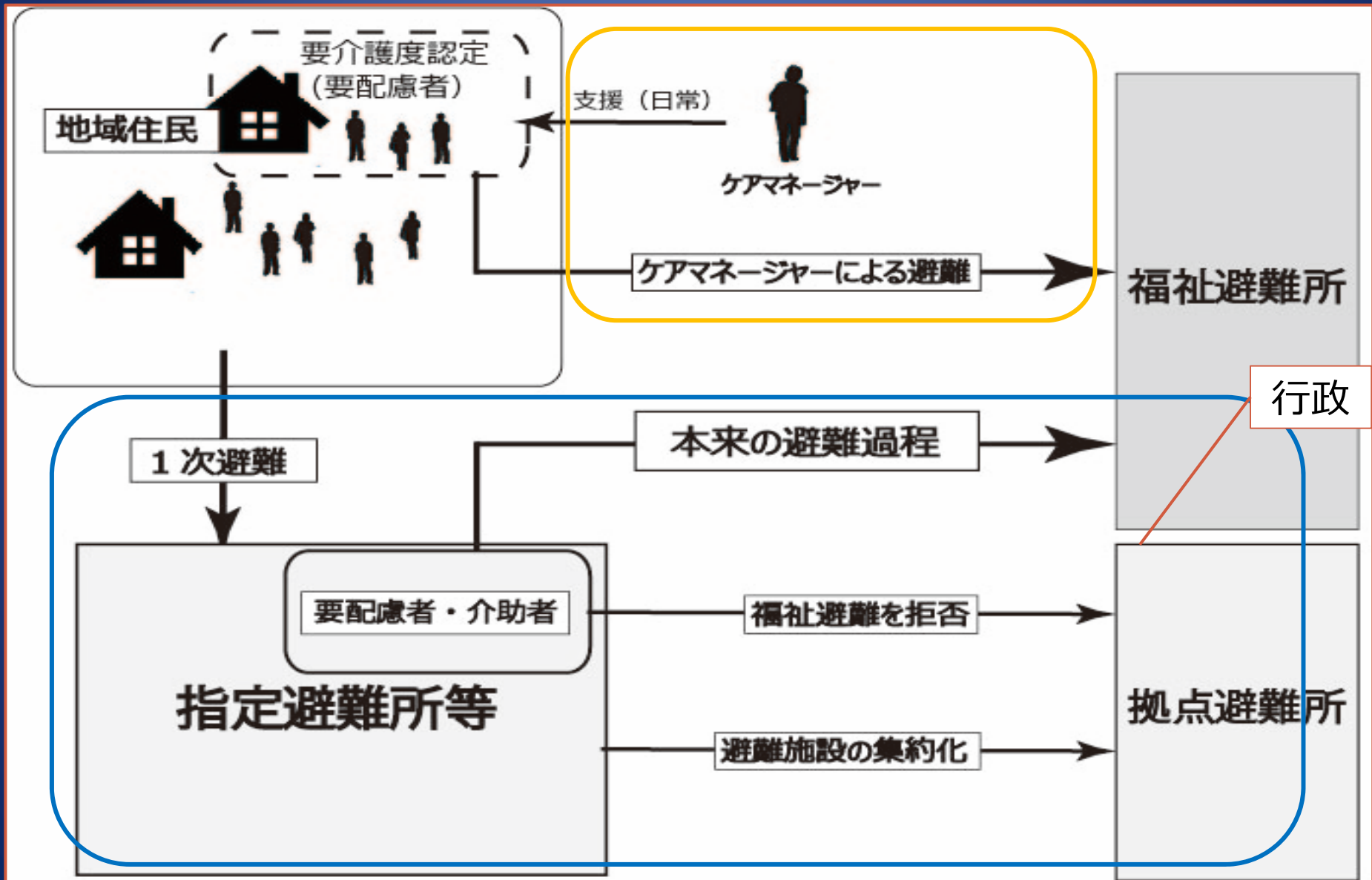
## 2. 困難な避難生活による被害

- 避難所の状況
  - 身体への負担

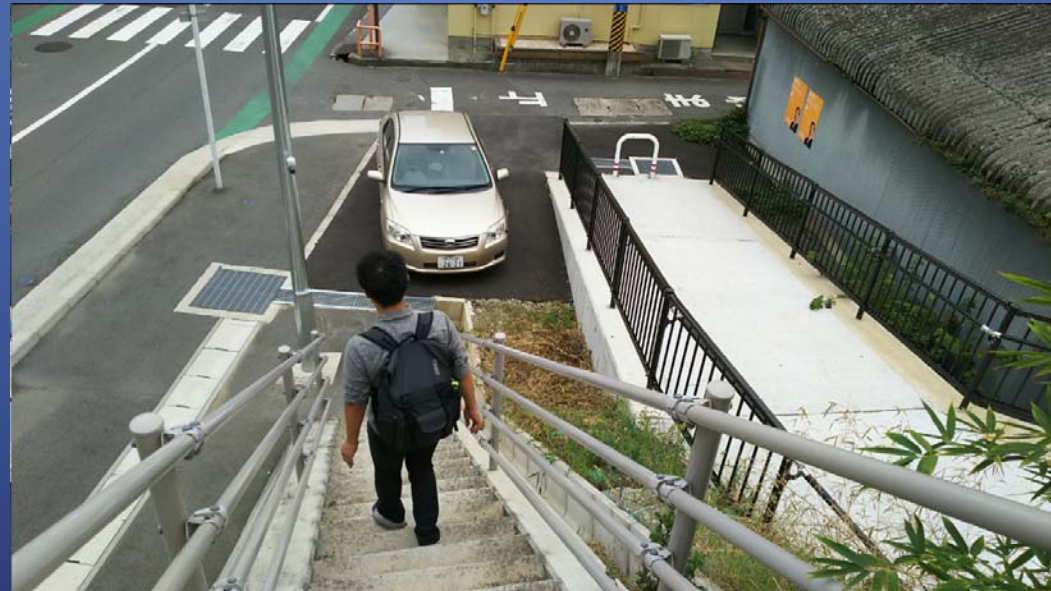
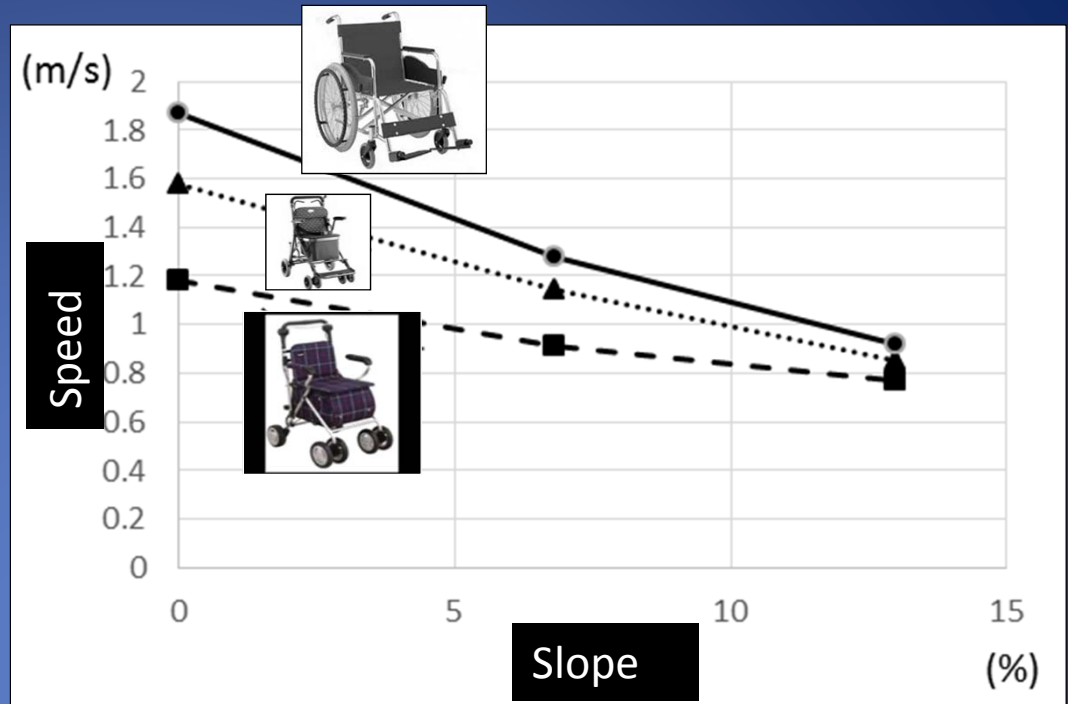
## 3. 復旧・再建の困難による被害

- 復旧状況
  - 今後の生活の不安

# 熊本地震における要配慮者の避難過程







地域を安全とするには

- ・ コミュニティの合意
- ・ 生活、景観等々の考慮
- ・ 工学的検討



高知県中土佐町の津波避難タワー（2017年5月27日撮影）





要援護者を  
避難搬送す  
る速度測定  
(2017年5月  
27日実施)





# 地域での防災研修の例(和歌山県海南市)

まち歩き

防災地図での検討

2017年9月



# 大学人として、どのようなスタンスで アプローチすべきか

- 知見があるのに 受け取られていない？



- 活かせる知見となっていない？

<その原因>

現場を見ていない

アプローチのあり方 支援と調査

知見の使い方 → 現場との連携のあり方

- 研究が復興・減災につながるか？

- どのようなやり方でもよいか

研究だけで、システムを作り上げるとダメ

被災者の状況を見ながら出ないとダメ

阪神淡路のあとの報告会 一人一人を説明できない

実際時に真に役立つものでないとダメ

災害時にはシステムが壊れやすいこと

(研究者は、計画したシステムが機能すると錯覚)

- なぜ知見が共有されないか、普及されないか

避難所での暮らし研究 なかなか現実に反映されない